

## ところどころ外れてゐたる枝の雪

岩田由美（『雲なつかし』）

岩田由美さんの第四句集『雲なつかし』（ふらんす堂）が出版された。滋味ある句集だ。たぶん何度も読み返すだろう。

雪後、晴れてくると、木からしづり雪が落ちてくる。枝を見ると、ところどころ雪が落ち、ところどころ雪が残っている。そういう景は誰もが普通に見ることだ。特段変わったことを言っているわけでも意表を突くなにかがあるわけでもない。けれども作者には、雪が途切れて黒い枝が見えている、そのことが心にとまったのだ。かんたんな景をかんたんに言っただけのようであり、「枝の雪」という納めかたも「外れて」というとらえ方もなかなか初心者にはできないだろう。簡潔で余すところがなく、何を付け加える必要もない。ただそのことだけを讀んで、混じり気がない。だから、読者にはある俳句的快感がもたらされる。

岩田由美さんは、波多野爽波の俳誌「青」の出身である。私も出かけるときは「青」を一冊書棚から引き抜いて行く。先日、たまたま引き抜いたものに、こういう言葉があった。爽波の「選後に」という欄の一節である。

「『多作多捨』は私の長年の信条であると共に、少なくとも『写生』について語るときには必須の前提条件であり、多作をしない人、多作ができない人に『写生』について説き、或いは語り合うことの無意味さを長年の間に幾たびか味わってきた。『青』の同人を含めたすべての人に対して端的な物云いをさせて貰うとすれば、一ヶ月にたったの百句も句帖に書きとどめ得ないとすれば、その人は俳句を作っている、少なくとも俳句を勉強しているとは言い得ない」。

何とも背筋の伸びる話である。